栄えあり上峰

学ぶ心
磨く心
鍛える心

上峰中学校生徒指導部だより（文責 矢動丸）R7.6.23

勝負の神様は細部に宿る

朝、通勤している際の出来事です。信号のない横断歩道を渡ろうとしている中学生がいました。私が止まる前に、2台前の車が停車しました。その高校生は、足早に横断歩道を渡ったかと思ったら、振り返ってお辞儀をしてくれていました。それも、両方向の車だけでなく、その後ろに停車している車にも頭を下げていました。私は、こんな中学生の行動にとっても感動し、良い気持ちで帰宅することができました。上峰中学校の付近にも、信号のない横断歩道がたくさんあります。教えられたり、褒められたりしたその時だけ頑張る生徒は毎年いますが、2カ月が過ぎてもたくさんの方がわざわざお辞儀をしてくれています。そういった1年生を見ると、とても「素直」に見えます。2、3年生で面倒くさがらず、きちっとお辞儀ができる生徒を見ると、自然と大人同士の対応になります。不思議です。

さて、今週末に地区中総体が迫ってきました。毎年、中総体を迎え、考えるのは、どのような状況下でも、上峰中の誇りと礼儀をもって全力で闘ってきてほしいということです。私のこれまでの中総体を振り返ってみると、大きな出来事で勝敗が決まるというものではありませんでした。「なぜここでもう一步寄せてディフェンスできなかったの」「なぜパスした後走らなかったの」という、大きなプレーの前の「小さなこと」が勝敗を分けていることがほとんどでした。一流の選手（大きなことを成し遂げる）が備えている資質として、「小事を大事にする」ということが挙げられます。天才はめったにいません。天才ではない人が、相手よりいいプレーをし、抜きんでいくためには「小事」「細事」が非常に大事です。「小事を大事にする」ためには、小事に気付かなければなりません。一流選手は小事に気付く感性に優れています。逆に言えば、鋭い感性をもたない人、少なくとも「もとうとしない人間」は、絶対一流にはなれないのです。

ロシアの文豪トルストイは「人間の最大の悪は鈍感である」と言っています。一流になる人は失敗もしますが、同じ失敗を繰り返しません。何度も同じ失敗を繰り返す

人は、一流にはなれません。なぜならば、失敗した原因（小事）に気付かないからです。失敗した後に、まずやるべきことは原因（小事）を見つけることなのに、「気合だあ！」といっても始まりません。失敗を認めるのは誰でも辛いものですが、責任を他人に押し付けたり、自己弁護したりと言いつつも何の解決にもなりませんし、一流への成長など望めません。

頑張っていれば、いつか報われる。

もち続けていれば、夢は叶う。

そんなのは幻想だ。

たいてい努力は報われない。

たいてい正義は勝てはしない。

たいてい夢は叶わない。

そんなことは現実の世の中ではよくあることだ。

けれど、それがどうした。スタートはそこからだ。

新しいことをやれば、必ずしくじる。腹が立つ。

だから、寝る時間、食う時間を惜しんで、何度でもやる。

さあ、昨日までの自分を越えろ。

負けるもんか。

以前、ワールドカップ中継で流れた某自動車会社のCMでした。スポーツには必ず相手がいます。相手も最後の大会に向けて死に物狂いで臨んできます。敗因は「自分たちのプレーができなかった」こととよく聞きますが、相手の良いところをつぶしていくのは勝負のセオリーですので、自分たちの形を出せないことはよくあることです。では、自分たちの形が出せなくても勝っていくチームはどんなチームでしょう。それは、「自分たちの形」がうまくいなくても、「自分たちのやるべきこと」は最後までやり続けるチームです。勝ちたいのは我々だけではありません。相手に勝つということは、相手の夢や思いを砕き、なお、それを背負って戦うという「覚悟」がいるのです。「どんなにきつくても、仲間のために、応援してくれる人のために、自分のやるべきことをやり続ける。」それが覚悟なのです。一番になることは難しい、でも一流になることは思いがあれば、どの部でもできます。「小事」を「大事」に、一流の闘いを目指して頑張ってください！

「勝ったら、静かにお帰り。負けたら、堂々と帰って来い！！」